

中央区制40周年記念誌

中央区のあゆみ

先史時代～現代



先人のあゆみを知れば
まちへの愛が深まり
その愛が集まれば
まちがもつと輝きます

著者 道谷 卓
発行 神戸市中央区役所

刊行にあたって

令和2年12月1日で、中央区は区制40年を迎えました。

昭和55年に旧葺合区と旧生田区が合併して新しく生まれ、その翌年にポートアイランドが街びらきをして歩みを進めてきました。その後、阪神・淡路大震災を経た後、人口は増え続け、現在は三宮再整備が進みだし、神戸の顔として再びまちは大きく変容を遂げようとしています。

古来より歴史を刻み、慶応3年に開港した港とともに、ハイカラ文化を育みながら大きく発展してきた中央区は、先人が活躍し、経験してきた様々なできごとが存在します。区が歩んできた歴史の積み重ねを紐解くことは、まちづくりを進めていくうえで、大変重要なことだと思います。本書が、現在と未来への橋渡しとなれば幸いと存じます。

最後になりましたが、「中央区歴史物語」はじめ、これまで発行してきた区の多くの歴史刊行物を執筆、改訂していただいた道谷卓様そして現在のフラワーロードの力強い街並みを表紙にご提供いただきましたとみさわかよの様には、心から感謝申し上げます。

令和2年12月1日

神戸市中央区長 清家 久樹



目次

はじめに	1
先史時代	2
古代	5
中世	8
近世	12
近・現代	16
著者あとがき	28

表紙の作品「フラワーロード2020」

せんが
剪画作家 とみさわ かよの

神戸のまち、神戸に生きる人を剪画（切り絵）で描く。神戸市文化奨励賞受賞。北野異人館街にある国指定重要文化財「萌黄の館」支配人として日々、まちの活性化にも尽力している。



中央区のあゆみ

道谷 卓

はじめに

神戸市中央区は1980（昭和55）年12月1日に、旧葺合区ふきあいと旧生田区いくたが合併して誕生した区である。

中央区は神戸市9区のなかで、まさに中央部分に位置する区であり、古来、摂津国せつつのくにに属していた。六甲山地と大阪湾に挟まれた傾斜地に東西約5km、南北約9kmを擁した区域を有し、北は六甲の山々を隔てて北区と、東は灘区と、西は兵庫区と接している。世界有数の国際港・神戸港の大部分はこの中央区に属しており、その中には神戸初の人工島・ポートアイランドが堂々と浮かんでいる。

昭和時代後期から平成のはじめにかけて、大都市ではドーナツ化現象の結果、都心部の過疎化が進み、中央区の定住人口も一時、約11万5000人と減少した（全盛期は1960<昭和35>年の17万8000人）が、近年の都心回帰により、合区40年の2020（令和2）年には14万3000人に回復している。また、昼間人口は定住人口の倍以上にあたる約30万人に膨れあがり、中央区は、行政、経済の中樞を担う街として機能している。

このような中央区も元は葺合区と生田区という二つの区が合併して出来た区であり、両者は旧生田川（現フラワーロード）を境に分かれていた。古代より、両者は摂津国の一部であったものの、旧生田川を境界に葺合は摂津国菟原郡うはらぐんに、生田は摂津国八部郡やたべぐんというように異なった行政区域に属していたのである。中央区の発足というのには裏返せば、こうし

た歴史的に由緒ある葺合、生田という二つの区名が消滅したということでもある。しかしながら、区名としては消えてしまった葺合、生田という名も現在、区民センター、警察署、学校などの名称に残されている。こうした葺合、生田時代の残照を残しつつも、中央区は統合された一つの区としてさらなる飛躍をとげようとしていた。

しかし、そうしたさらなる飛躍という地域住民の願いを一瞬にうち砕くような出来事が起こってしまったのである。1995（平成7）年1月17日午前5時46分、大都市・神戸を襲った阪神・淡路大震災であった。震度7の激震地を区内に持つ中央区は多くの被害を出した。神戸で地震は起こらないという神話がいつの頃からかひとり歩きし、我々市民もそれを信じてきたように思える。しかし過去の事実は正直なもので、この辺りは約400年前に慶長の大地震を経験しており、我々はそのことを完全に忘れさせていた。

震災から25年が経過し、中央区は震災での体験を生かしつつ、安全で住みやすい都心をめざして、あらたな中央区を築いて行こうとしている。歴史は言うまでもなく、我々人間の営みの連鎖であり、時の経過によって明らかにされた事実と評価がその中に含まれている。そこで、阪神・淡路大震災から25年、中央区誕生から40年という節目の年に、我々の街の歴史を振り返り、中央区の現実を把握し、今後の中央区のまちづくりの一つの指針として過去を見つめ直すことが必要になってくるのである。

先史時代

—埋葬遺物から辿る先史時代の中央区—

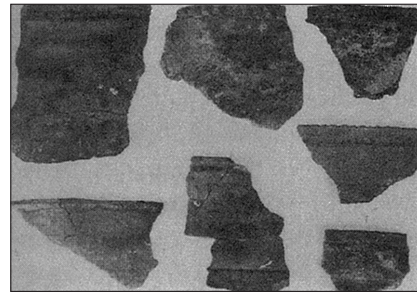
*先土器時代

日本列島がアジア大陸と分断し、現在のよ
うな形を成したのは今から1万年前だといわ
れている。その1万年前より以前を地質年代
では更新世と呼んでおり、この時代、既に人
類が日本列島で生活を営んでいたことが確認
されている（まだ土器を伴わないことから、こ
の時代の文化を先土器文化という）。

中央区では今のところ、こうした更新世、つ
まり先土器時代の人間の営みを示す遺跡は
発見されていないが、明石市の西八木海岸か
らは更新世人類と思われる人骨が発見されたり（明石人）、兵庫区の会下山から先土器時
代の遺跡が確認されるなど、中央区周辺では
いくつかの先土器時代の跡が見つかっている。
先土器時代の中央区については、地形的
にみて、当時も北は山、南は海というような今
と変らない地形をしていたであろうし、南向き
の斜面で飲料水も豊富で生活に適したであ
ろうが、これまでに発見された遺跡がないた
め、確実なことは言えない。

*縄文時代

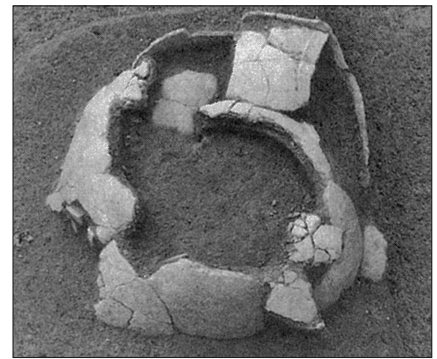
縄文時代（約1万年前～約2500年前）にな
ると、人々は土器を作り（縄文式土器）、竪穴
住居に居住し、狩猟・漁撈^{ぎよろう}の採集経済を営
んでいた。



◀宇治川南遺跡出土
縄文時代晩期土器片
（資料提供/神戸市文
化財課）

▼雲井遺跡出土縄文
時代晩期土器棺
（資料提供/神戸市
文化財課）

中央区で
も宇治川南
遺跡（橋通1
～3丁目）か
ら各時期に
わたる多種
の縄文式土

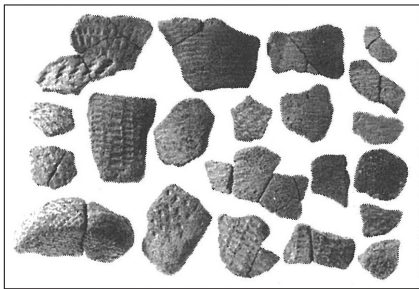


器が多量に出土している。このうち最も古い
ものは縄文時代早期のものが含まれており、
また、縄文晩期の土器とともに出土した土偶
や石棒はこの付近の縄文時代の祭祀^{さいし}にかか
わる遺物とみられ貴重なものと言えよう。な
お、これらの土器の中には関東・東北地方の
ものと思われるものも含まれており、また、大
分県姫島産の黒曜石が晩期の土器に伴って
出土するなど、この時代すでに関東から九州
に及ぶ広い地域と交流があったことがうかが
える。さらに、雲井遺跡（雲井通6丁目、現・
サンシティビルの場所）からは縄文時代前期
の屋外炉が4基、縄文後期の集石遺構一
基、縄文式土器などが見つかると、二宮東遺跡



◀熊内遺跡(第3次調査)
縄文時代早期竪穴住居跡
(資料提供/神戸市文化財課)

▼熊内遺跡(第3次調査)出土
縄文時代早期押型文土器
(資料提供/神戸市文化財課)



(二宮町1丁目)からは縄文時代早期の土器が複数見つかるなど、縄文

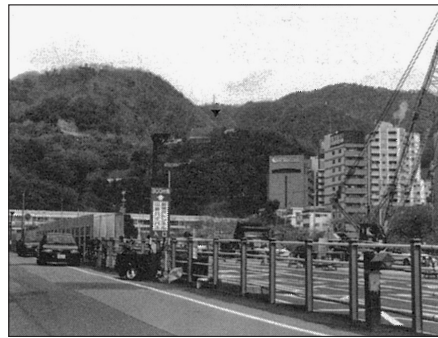
時代の人類の生活痕を今の世に伝えてくれている。また、熊内遺跡第3次調査(熊内橋通7丁目)で、縄文時代早期の遺跡が見つかり、早期前半に属する竪穴住居が確認され、早期の押型文土器や晩期の摩滅の少ない土器片が出土している。

こうした遺跡から、縄文時代の中央区がかすかながら浮かび上がってくるが、より詳しいことについては今後の遺跡・遺物の発見を待つより他はない。

* 弥生時代

今から約2500年前と想定される縄文時代の末期に大陸から九州北部に農耕や金属器を伴う進んだ文化が伝えられ、紀元前4世紀頃には、西日本に水稲耕作をもとにした弥生時代(約2500年前～2.3世紀)が始まっていく。近畿地方では、明石川の流域の低湿地に最も早く水稲耕作が営まれたという。

中央区でも布引の砂山の麓、今では徳光院



◀布引丸山遺跡遠景
(資料提供/神戸市文化財課)

の墓地となっている付近から弥生時代中期のものと思われる土器が多数発見されたことがある。この遺跡は布引丸山遺跡(葺合町)と呼ばれ、このような発見から紀元頃にはこの地に人が住み、稲作が行なわれていたことがわかっている。なお、この遺跡は標高140㍎の位置にあり、六甲山南麓の丘陵上に点在する高地性集落の一つと考えられる。また、雲井遺跡(雲井通6丁目)からは弥生時代中期の方形周溝墓が6基も群集して発見され、周溝の中に供献された土器や埋葬された木棺などは当時の墓制や習慣を知るための貴重な資料と言えよう。さらに、宇治川南遺跡(橋通1～3丁目)からは弥生時代前期の弥生式土器が出土している。そして、熊内遺跡第2次調査(熊内橋通6・7丁目)では弥生時代後期の竪穴式集落跡が見つかっている。この遺跡から見つかった集落跡は、直径10㍎、深さ40㍎の円形竪穴住居である(なお、この住居跡のすぐ上の層から弥生時代末から古墳時代初期と思われる一辺7.4㍎の方形竪穴住居跡も見つかっている)。住居跡には弥生式土器が多く残っており、また、集落間の抗争に使用されたとと思われる武器の類(鏃・投弾・球形の石など)も見つかった。このうち、銅製の鏃は両側のとがった部分を二つずつ持つという珍しい形(抜けにくいように工夫し



▲宇治川南遺跡出土弥生時代前期土器
(資料提供/神戸市文化財課)



◀雲井遺跡、弥生時代
中期周溝墓全景
(資料提供/神戸市
文化財課)

たものと考えられる)をしており、注目された。その他、弥生時代の遺跡としては旧三ノ宮駅構内遺跡(北長狭通)や浜町遺跡(栄町通付近)などがあげられ、神戸大学附属病院内からは弥生時代の石鏃などが見つかっている。また、熊内遺跡第3次調査(熊内橋通7丁目)から弥生時代後期の弥生式土器が多数出土し、さらに、阪神・淡路大震災で倒壊した神戸栄光教会(下山手通4丁目)を再建する際に、弥生時代の絵画土器(県内二例目)が発見された。これは、^{たかつき}高坏形土器の脚の部分で、魚の絵が描かれていた。

* 古墳時代

縄文時代の末に始まった水稲耕作が弥生時代になると本格的に行われるようになり、その農耕生活が発展すると社会の中に貧富の差を生み出すことになった。こうした農耕の発展による貧富の差は支配する者と支配される者という社会構造の変化をもたらすこと

になる。このような社会構造の変化が小国家へと発展して行き、その中で成長した豪族は自らの権威を誇示せんがために古墳を築くのであった。

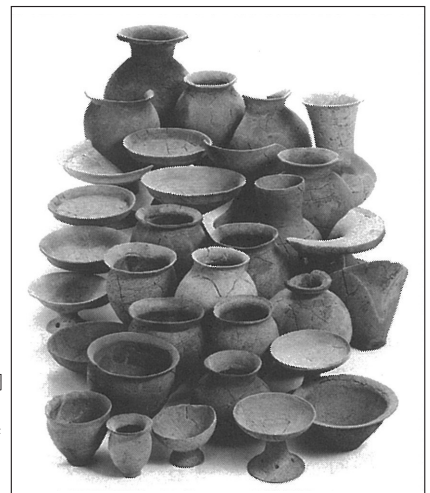
中央区内にもこうした古墳の存在が伝えられているが、早くから市街地化が進んだせいもあり、その大半は今日消滅してしまっている。

古墳時代前期の古墳はこれまで中央区では知られていない。

続く古墳時代中期であるが、この時期は大仙陵(伝仁徳天皇陵)に代表されるよう、古墳が巨大化し、形状も前方後円墳が主流となる時期である。中央区では^{おとめづか}脇浜乙女塚(脇浜町3丁目)がこの中期の古墳にあたると言われている。脇浜乙女塚は昭和の初めまではまだ封土を残しており、前方部を東に向ける前方後円墳であったが、出土品などは不明な



◀熊内遺跡(第2次調査)
竪穴住居跡
(資料提供/六甲山麓
遺跡調査会)



▶熊内遺跡(第3次調査)出土
弥生時代後期土器
(資料提供/神戸市
文化財課)



ため、詳細は定かでない。

そして、古墳時代後期の古墳は区域至る所にあったことが確認されており、中央区にあった後期の古墳としては以下のようなものがある。割塚古墳（割塚通1丁目）は横穴式石室を持つ大円墳であったし、中宮古墳（山本通5丁目）は横穴式石室を持つ直径約30mの前方後円墳で刀・金環・玉・鉄製品などが出土した。また、北野町には南に開口する横穴式石室を持つ三本松古墳（北野町2丁目）が存在していた。その他、旧葺合区域に畔塚（旧脇浜小内）・旗塚（旗塚通6・7丁目）・大塚、旧生田区域に城ヶ口古墳（海外

移住と文化の交流センター東南）・黄金塚（山本通5丁目）・氷雨塚（山本通5丁目）・馬塚（元町駅付近）・^{さほうづか}差方塚（中町通、戦前までは民家に並河誠所の建てた「差方塚」の碑があったが、戦争で消失してしまった）・姫塚（神戸地方裁判所付近）・化粧塚（JR神戸駅付近）などの後期古墳があったと言われているが、^{こがねづか}黄金塚（善照寺西隣の市有地に封土が現存、中宮古墳の^{ばいちょう}陪塚と考えられる）以外はいずれの古墳も後世の削平を受け消滅しており、周辺の地形も著しく変化し、それらの姿をうかがうすべも無い。



中央区の歴史

古代

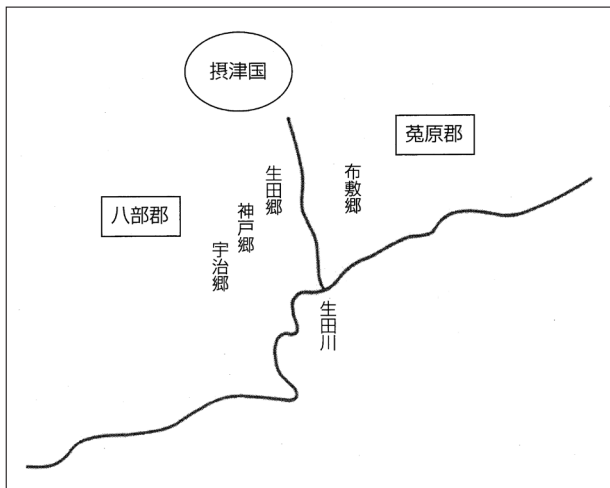
—生田の森・布引の滝などの景勝地で知られる 律令体制下の中央区—

* ヤマト政権時代

弥生時代以来の農耕社会の発展が人々の間に貧富の差を生み出し、小国家の成立を導いたわけであるが、遅くとも4世紀の半ばにヤマト政権がこうした小国家を支配していた豪族を従え、日本国内の統一を行なうことになる。ヤマト政権はこのような各地の豪族を、氏姓制度をもとにその体制下に組み入れたのである。

こうしたヤマト政権下に組み入れられた豪族はこの中央区にもみられ、『^{しんせんしょうじろく}新撰姓氏録』（815年）という後世の書物には中央区を支配した豪族として^{ぬのしきのおびと}布敷首や^{いくたのおびと}生田首といった名が見える。

布敷首は旧葺合区あたりを支配していたと^{かつらぎそつひこのみこと}思われ、葛城襲津彦命の子孫だと言われる豪族である。なお、灘区との境、割塚通1丁目のJRと阪急の高架に挟まれた場所に割塚の



【図1】律令制下の中央区

碑が立っており、そこには「布敷首之霊地」の文字が刻まれた石碑もある。地元では古くから、割塚がこの布敷首の塚ではないかと言う伝承があるが、その真偽は定かでない。

また、生田首は旧生田区あたりを支配していたと思われ、天兒屋根命（あめのこやねのみこと藤原氏の祖と言われている）の子孫だと言われている豪族である。こうした豪族たちが当時この中央区を支配していたと思われるが、前述の古墳もそのような豪族の手によるものではないだろうか。

* 律令体制の下で

このような豪族を従えて全国を統一したヤマト政権は、その後645（大化1）年の大化改新や701（大宝1）年の大宝律令の制定などにより、中央集権的国家を築いていくことになる。大宝律令に基づく律令体制により、国家は全国を60あまりの国に分け、その国をいくつかの郡に、そして郡をいくつかの里（のち郷と称する）に分けるという地方制度（国-郡-里<郷>制）を打ちたてたのである。

この中央区はこうした律令制の地方制度に



▲「摂津名所図会」より、生田社

よれば、せつづくにうはらぐん 摂津国やたべぐん 菟原郡・八部郡にあたる。この両郡は摂津国でも西端の方になり、菟原郡は六甲山の南、夙川から旧生田川までを、八部郡は旧生田川から須磨までをさしていた。後の平安時代、10世紀に記された『和名抄』わみょうしょうによると、菟原郡の中のぬのしきのさと布敷郷（旧葺合区一带）、八部郡の中のいくたのさと生田郷（のちの生田村・生田宮村あたり）、かんべのさと神戸郷（のちの神戸村から城ヶ口あたり）、うじのさと宇治郷（今の宇治川、宇治野山などに地名を残す旧生田区西部）という郷がこの中央区の区域に相当することがわかる（【図1】参照）。

ところで、菟原郡と八部郡の郡境は旧生田川（現在のフラワーロード、旧葺合区と旧生田区の境）であるとされているが、その生田川の流路にも多少の変遷があったように思われる。というのは、『和名抄』では八部郡に属している生田村（当時の生田郷）が後世になると生田川の東にあって菟原郡に属しているからであり、これは『和名抄』が記された当時は生田川が生田村の東を流れていたからではないかと考えられる。いずれにせよ、生田川を中心に生田の森や生田郷があり、かなり開けた地域であったのだろう。さて、生田郷という



のは古の「活田長峽」である。これは『日本書紀』にでてくる、神功皇后が朝鮮出兵の帰途、稚日女尊を祀った「活田長峽国」のことで、これが生田神社（下山手1丁目）のはじまりと言われ、その時祀られた地は砂山（丸山）であったが、後に洪水で社が流され、現在の地に移ったと伝えられている。

律令制の施行により、それまでの豪族による土地と人民の私有は廃され、かわって土地と人民は国家のものであるという公地公民制が取り入れられた。そして、この公地公民制に基づき、班田収授法（国家が人民に口分田を与え、人民は国家に税を納める）を実施したが、この時の土地制度が碁盤目状に土地を区切った条里制である。このような条里制は当然この中央区でも行なわれており、旧葺合区の南半分の区画はこの条里制の遺構として顕著な例であると言われている。

*奈良時代・平安時代

奈良時代にはいと律令制も動揺しはじめ、公地公民制もゆらいでくる。その結果、貴族、寺社などの有力者の私有地、すなわち荘園が出現するのであった。そして、平安時代の末には区の西部に平家領の福原荘が形成されて行く。さてその頃、このあたりにはどれくらいの人があったのであろう。『撰津国大計帳』（1120<保安1>年）によれば、菟原郡には15,695人、八部郡には22,145人の人がおり、すなわち夙川から須磨にかけての両郡の区域には約3万8千人の人が住んでいたこと

になる。

なお、平安時代に律令の施行細則として制定された延喜式（927<延長5>年）に記載のある神社、すなわち式内社として生田神社が記載されている。生田神社はその当時から今日に至るまで存在する古い神社であることが確認されよう。また、平安時代の初期、空海によって開かれた真言宗は、密教の性格から各地に山岳寺院を建立していったが、再度山にある大龍寺（神戸港地方）はこの地方を代表する山岳寺院である。

当時、京と九州の大宰府を結ぶ主要幹線道路であった山陽道はこの中央区の海岸近くを走っており、多くの貴族たちがこの山陽道で中央区付近を通り西国へ向かった。そして、布引の滝（葺合町）や生田の森（下山手通1丁目）、若菜の里（中尾町）などは京都の貴族がしばしば訪れた名勝でもあり、多くの和歌が詠まれている。



▲「撰津名所図会」より、再度山大龍寺

—『平家物語』 生田の森の戦い、『太平記』 湊川の戦いの舞台となった中央区—

先史時代
—
古代
—
中世
—
近世
—
近・現代

* 平氏政権

11世紀の藤原氏全盛時代の後、上皇が政治を執る院政が行なわれるようになった(1086<応徳3>年)。このような中、地方では源氏や平氏などの武士が中央進出の機会をうかがい、保元ほうげんの乱(1156<保元1>年)・平治へいじの乱(1159<平治1>年)を経て、平清盛が強大な権力を手中に収め、平氏政権を開くことになる(1167<仁安2>年、平清盛が太政大臣となる)。すなわち、政治の担い手が貴族から武士へと変っていったのである。

平清盛は中央区の西部から兵庫区の平野にかけてあった自らの荘園、福原ふくはらのしょう荘を好み、その南にあった大輪田おおわだのともり泊を改修して中国の宋との貿易をはじめた。

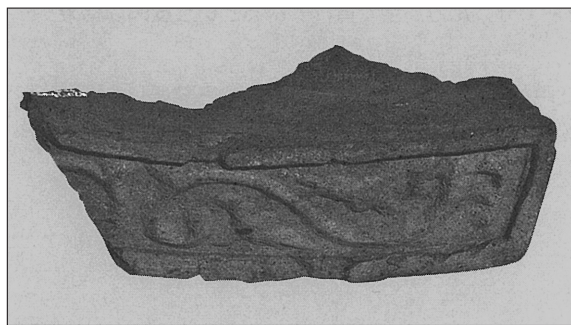
* 源平の争乱——ノ谷戦い・生田の森の戦い——

しかしその間、栄華をほしいままにした平氏に対しては反感も強く、1180(治承4)年4月には以仁王もちひとおうが平氏追討の令旨りょうじを出した。この以仁王による令旨が清盛に福原への遷都を決心させるのであった。同年6月2日、清盛は福原遷都を断行し、翌日安徳天皇が三種の神器とともにこの福原に到着した(福原京遷都)。これにより、再び都が京都にもどされるまでの約半年ではあるが、神戸が日本の首

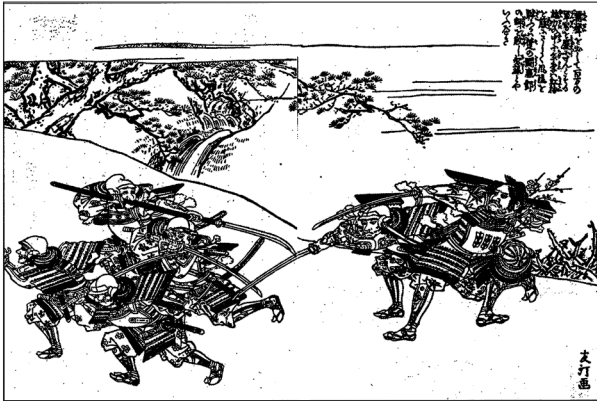
都になったのである。

なお、以前の発掘調査で、福原京の推定地とも重なる楠・荒田町遺跡(神戸大学医学部附属病院構内)から平安末期(12世紀)の唐草文様の軒平瓦と建物跡の柱穴が出土し、福原京関連の遺物ではないかと注目された。さらに、その後の調査で、同遺跡から同時期の掘立柱跡(柱穴は2列で5つが残り、約1畝の方形)が発見され、平氏一族の邸宅に備えられた櫓の跡ではないかと考えられ、福原京の建物の可能性もあるとされている。

ところが、この遷都の直後、8月には伊豆で源頼朝が、また9月には木曾義仲がそれぞれ平家打倒を旗印に挙兵したため、清盛は同年11月に再び京都に都を戻すことにした。その翌春、志し半ばに平清盛が亡くなり、木曾義仲が京へ進撃してきたため、平家は1183(寿永2)年に西国へと落ちていった(平家都落ち)。一方、京都に入った木曾義仲は貴族社会と対立し、後白河法皇が源頼朝にその追討



▲楠・荒田町遺跡出土軒平瓦



▲「摂津名所図会」より、生田の森の戦い・梶原景季えびら梅

を命じ、それに対し頼朝は弟の源範頼・義経に義仲追討を指示し京へと向かわせ、義仲を討たせた。

このような源氏内部の分裂を知った平家はこの機に都を奪回しようと屋島から兵庫に上陸し(1184<寿永3>年1月)、生田の森と須磨一ノ谷に陣を置き、源氏との決着を付けようと考えた。これに対し、義仲を討った源範頼・義経兄弟はその勢いで平家打倒を決意し、範頼は山陽道を西に下り生田の森を、義経は丹波を迂回し加古川筋にでて西から一ノ谷を攻めることにし、総攻撃の日を1184(寿永3)年2月7日とした。これが一ノ谷の戦いである。

中央区にある生田の森はこの一ノ谷の戦いの東の拠点となり激しい戦いが行なわれた。生田川を挟んで川の東には源氏の範頼軍が、西には平家の知盛軍が対峙した。この生田の森での攻防は源氏の大勝に終わったが、この時の様子は『平家物語』にも描かれている。なお、小野八幡神社(八幡通4丁目)はこの生田の森で戦死した源氏方の河原太郎・次郎兄弟のために、源頼朝が建てた報恩寺であったと伝えるが定かではない。結局、一ノ谷の戦いで大敗した平家は続く屋島の戦

いでも敗れ、1185(文治1)年、長門の壇ノ浦で滅亡したのである(壇ノ浦の戦い)。

* 鎌倉時代

平家滅亡の後、源頼朝は1192(建久3)年、征夷大將軍に任命され鎌倉幕府を開くことになった。これ以後、江戸時代の終わりまで約680年間の長きに渡る武家政権が日本を支配することになる。鎌倉時代に入った1207(承元1)年、承元の法難で讃岐に流罪となる法然が脇浜の庄屋宅に立ち寄り、それがきっかけで庄屋は仏門に入り阿弥陀寺(脇浜町2丁目)を開いたといわれている。

ところで、中世になると中央区の地域には福原荘、輪田荘、葺屋荘といった荘園が形成されていた。福原荘はもともと平家の荘園であり、宇治川より西の奥平野にかけて立てられた荘園で、後に宇治川から生田川までに拡張され兵庫区から中央区の西半分をその領域とした。平家滅亡後、この福原荘は鎌倉幕府によって没収され(平家没官領)、宇治川の東だけにその名が残された。そして、宇治川より西の区域は兵庫三箇荘(上・中・下)の名が付けられたのである。この兵庫三箇荘のうち、兵庫上之荘が中央区の走水・坂本と兵庫区の荒田の三村から成っていた。

輪田荘はもと兵庫区の和田岬辺りに立てられた荘園であるが、12世紀の初頭にその辺りから宇治川に散在する田畠をその中に加えていった。

葺屋荘は旧葺合区一帯を荘域とする荘園で、鎌倉時代に立てられたものといわれているが定かではない。ただ、次の南北朝時代の1348(正平3)年に河内国(大阪府)の安養



▲「撰津名所図会」より、布引の滝

寺の荘園になったという記録が残っている。

ところで、この葺屋という名は一体どこからきたのであろうか。一説によれば、この地が葺屋あしやと呼ばれる区域に入っていた時期があり、この「葺」がよく似た「葺」という字に誤写されたのではないかという。そして、葺屋は「吹き屋根」に通ずるといので葺合ふきあいに改められたというが、葺合という名が史料に登場してくるのは早くとも近世に入ってからである。

鎌倉時代に入り、源平の争乱で中断した兵庫の港（大輪田泊）の修築も東大寺の僧重源ちゅうげんによって再開され、以後海上交通の要衝としての地位を不動にする。こうした兵庫の港に時宗の一遍や西大寺の叡尊が布教のために訪れている。

1274（文永11）年の文永の役、1281（弘安4）の弘安の役と、二度にわたる元寇（蒙古の襲来）で幕府は大きな打撃を受け、これをきっかけに鎌倉幕府は衰亡への道をたどって行くことになる。

* 南北朝の動乱

こうした中、朝廷では後醍醐天皇が即位し、幕府打倒を策するのであった。天皇は正しょうちゅう中の変（1324<正中1>年）、元弘げんこうの変

（1331<元弘1>年）と倒幕の行動を起こすが失敗し、隠岐に配流されてしまう。後醍醐天皇が隠岐へ流される途中この中央区を通過しており、布引の滝を見たという場面が『増鏡』の中に登場する。しかし、この変が契機となり、鎌倉幕府に反感を持つ武士たちが各地で挙兵した。そして、1333（元弘3）年1月には播磨の赤松則村（円心）が兵を挙げ摂津の摩耶山合戦で幕府軍を破り、5月には足利尊氏が六波羅探題を落とし、その直後に新田義貞が鎌倉を攻め、ここに鎌倉幕府は滅亡するのであった。

1334（建武1）年から後醍醐天皇は建武中興を行なうが、実情にそぐわず、不満を抱く武士たちは足利尊氏に率いられ後醍醐天皇に反旗を翻したのである。ここに南北朝の動乱が始まるのであった。

1336（延元1）年1月、新田義貞を討つため京に上った足利尊氏は、これに敗れ西へと逃れ、新田義貞・楠木正成軍と打出でも戦ったがこれにも負け、九州へと敗走した。九州で勢力を挽回した尊氏は再度の上京をはかり、水陸両軍で都へ出発した。こうした足利軍の動きに対し、後醍醐天皇側は、正成が湊川から会下山にかけて陣を張り足利の陸軍に備え、また、義貞が兵庫築島つきしま辺りに陣を構え



▲「撰津名所図会」より、湊川血戦

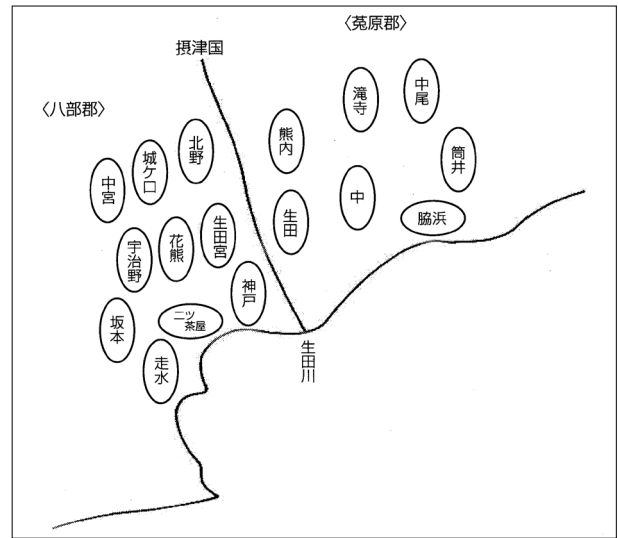


足利水軍に備えた。しかし、正成・義貞両軍は奮闘もむなしく足利軍に大敗し、正成は部下を布引方面に逃した後、湊川の北の民家に入って小屋に火をかけ自刃した。これに殉ずるもの一族28人と言う（同年5月25日）。一方、義貞は敢闘の末、京都へと敗走するのであった。これが湊川の戦いであり、この名称は湊川が戦いの中心であったことを物語り、その様子は『太平記』に描かれている。そして、この中央区の西部は湊川の戦いの古戦場なのである。

* 室町時代

こののち室町幕府が成立し（1338<延元3>年）、世は室町時代へと入って行く。この辺りは摂津守護となった赤松範資^{のりすけ}が支配することになり（1337<延元2>年）、範資は再度山上に多々部城^{た た べ}を築いた。こうした中、幕府を開いた足利氏は、尊氏と弟の直義^{ただよし}との間で内紛が起こり（観応^{かんのう}の擾乱^{じょうらん}）、両者は打出・御影浜で戦い、敗れた尊氏は須磨の松岡城へこもったが、和睦が成立した。3代将軍義満が明との間で貿易を開始し（日明貿易）、この兵庫の港がその貿易の拠点となり、歴代の将軍は明船見たさに中央区を通り兵庫の港へと足を運んだのである。なお、室町の初期には赤松氏が支配していた中央区一帯であるが、1378（天授4）年からは細川氏が摂津の守護となり、以後中央区は細川氏の領するところとなった。

室町幕府はもともと基盤が弱く、各地の守護大名が互いに勢力を争っていた。将軍家の後嗣問題に端を発した1467（応仁1）年からの応仁の乱を契機に、幕府は衰退の一途を



【図2】中央区の郷村

たどり、世は戦国時代へと突入して行くことになる。この戦国時代に摂津国は下剋上の結果、細川氏からその家臣の三好長慶へと支配が移り（1544<天文13>年）、この三好長慶もその家臣の松永久秀に討たれ（1564<永禄7>年）、次々と権力交代がおこった。ところで、この松永久秀が守った城が布引の滝の西方にある滝山城である。滝山城は1556（弘治2）年に久秀が、主君三好長慶をこの城に迎えたということで突如として史上に登場する。しかし、おそらくは長慶がこの辺りを支配した時に築き、久秀に守らせたものと思われる。

こうした中、農民たちは自らの生活を守り、結束を固め、農民が地域的に結合して郷村が形成されるようになり、戦国時代の末には中央区にも次のような村々が出来上がるのであった。すなわち、山麓部には東から中尾、滝寺、熊内、北野、城ヶ口^{じょうがぐち}、中宮^{なかみや}、浜辺には東から脇浜、神戸、二ツ茶屋^{ふたつちや}、走水^{はしうど}、それらの中間には東から筒井、中、生田、生田宮、花熊、宇治野、坂本といった村々が出来上がっている（【図2】参照）。

—江戸時代・幕藩体制下での中央区の発展から、 幕末・神戸開港と近代化のめばえ—

* 織豊政権

応仁の乱後、世は戦国時代へと突入し、群雄割拠がなされる中、全国統一のさきがけをなしたのは織田信長である。信長は1560（永禄3）年、当時天下人に一番近い位置にいた駿河の今川義元を桶狭間の戦いに破り、天下統一の道を開いた。

この頃、下剋上で三好長慶に代りこの辺りを支配した滝山城の松永久秀は、1565（永禄8）年の13代将軍足利義輝暗殺の首謀者とも言われ、久秀の専横がひどくなるにつれて三好三人衆はこれを押さえようとした。その後、滝山城は落城し三好三人衆の手に移るがこれも長くなく、最終的に城は織田信長の手中に入ったと言われている。

このような中、摂津は織田信長の手に入るところとなり、荒木村重^{むらしげ}が伊丹城に本拠を置き摂津守として西摂一帯に勢力を張った。荒木村重は信長の命により、1574（天正2）年

（一説では1568<永禄11>年）にこの中央区に花熊城（花隈町一帯）を一年で築いている。この花熊城に、村重は家老の荒木志摩守元清を置き中央区近辺を支配させていた。

ところが、村重は信長に重大な嫌疑をかけられるというアクシデントが発生する。これは村重の部下が、ひそかに当時信長と対立していた石山本願寺に物資を供給したというものであった。信長の性格上、いったん疑いをかけられればそれを解くことは困難であると考えた村重は、毛利氏に応援を頼み、1578（天正6）年10月、信長に反旗を^{ひるがえ}叛したのである。信長は池田信輝、輝政親子に花熊城攻撃を命じ、1580（天正8）年2月に花熊城は陥落した（花熊城の戦い、花熊合戦）。陥落後、信輝は花熊城を解体し、かわって兵庫城を築き、兵庫一帯を支配することになり、従って中央区も池田信輝の支配するところとなった。

織田信長は1582（天正10）年、本能寺の変で明智光秀に討たれ、かわって豊臣秀吉が天下統一の事業をおこなって行くことになる。秀吉は戦乱を鎮め、天下を自らの手中におさめる過程において、この中央区の村々に対して検地を実施した（いわゆる^{たいこう}太閤^{けんち}検地）。そして、1583（天正11）年、中央区のほぼ全域が豊臣領となり、このあたりは豊臣秀吉の支配を受けることになった。



▲花隈合戦の図(区誌生田いまむかしP112より)



ところで、中央区が豊臣秀吉の支配を受けていた慶長期、近畿地方を大地震が襲った。1596（慶長1）年閏7月の慶長の大地震で、その余震は数か月に及んだという。この地震で伏見城の天守閣が倒壊し、神戸でも兵庫津の町の家屋のほとんどが倒壊し、その後の火災で炎上、港町は壊滅的な被害を受けたと記録は伝えている。中央区内の被害についてはその記録をとどめる史料がないので詳らかではないが、隣の兵庫区の兵庫津が全滅であることからすると中央区内も相当な被害が出たものと推測されよう。

*江戸時代・幕藩体制の下で

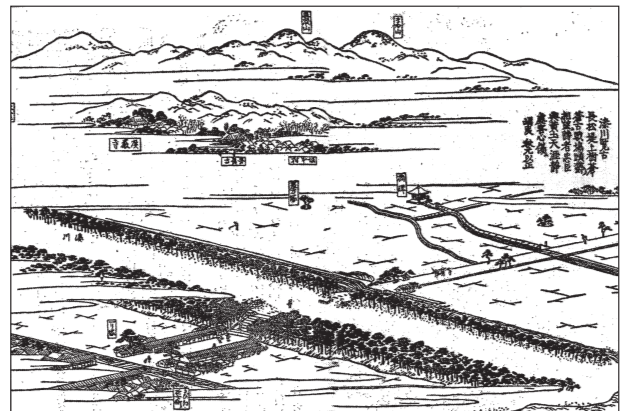
1598（慶長3）年、豊臣秀吉が62歳の生涯をおえた後、天下は徳川家康の勢力（東軍）と石田三成を中心とするそれに反対する勢力（西軍）とに分かれ、両者は1600（慶長5）年、関ヶ原の戦いで決着をつけることになった。戦いは東軍の圧勝におわり、ここに家康の覇権が誕生することになる（なお、家康は1603<慶長8>年、征夷大將軍に任命され江戸幕府を開いている）。これにより、秀吉の子豊臣秀頼は摂津・河内国を支配する一大名（約65万石）に蹴落とされてしまった。

秀吉存命中は豊臣領であったこの中央区も、秀頼が摂津・河内の一大名になったため、形式上は秀頼の支配するところとなるが、実質的には秀頼の財政をみることになった摂津国茨木城主片桐且元かたぎりかつもとが支配することになる。そして、且元は部下を派遣し中央区一帯を管理させ、1604（慶長9）年以降は弟の片桐貞隆に管理させることにした。

1615（元和1）年、大坂夏の陣で大坂城が

落城し、豊臣家が滅亡すると、豊臣の直轄地であった中央区は徳川幕府の天領とはならず、大部分の村々は尼崎藩の領地に組み込まれることになる。つまり、中央区の大部分は、1617（元和3）年、近江国膳所ぜぜより尼崎藩5万石の藩主として入封した戸田氏鉄うじかねの所領となるのであった。ついで1635（寛永12）年には遠江国掛川とおとうみから同じく5万石で青山幸成よしなりが尼崎藩主として入封し、計4代青山氏が領する。また、1711（正徳1）年には遠江国掛川ただちかより松平（桜井）忠喬が4万石で入封し尼崎藩主となり、計7代松平氏が支配し幕末をむかえる（中央区の村々の石高並びに支配関係については表1、表2を参照）。このように、中央区の大部分は戸田、青山、松平と言った譜代大名の領するところとなったのである。

なかでも、青山氏の2代青山幸利よしとしは善政をもって領民にこたえ、坂本村の安養寺あんようじ（楠町7丁目）などにはその景仰碑が建てられている。また、坂本村の東、西国街道のわきに湊川の戦いで戦死した楠木正成の塚があったが、この塚にまず尼崎藩主青山幸利が五輪塔を建て、その後1692（元禄5）年には徳川光圀の命により佐々宗淳ささむねきよがこの地に赴き楠



▲「摂津名所図会」より、湊川、楠正成墳

【表1】中央区・旧村の石高の変遷

	摂津一國高御改帳 元和3年(1716)	天保年間郡郷帳 (1830~1843)	旧高旧領取調帳 (幕末)	幕末時の 支配関係	
(旧置入区)	筒井	367石余	423石余	423石余	天領
	熊内	643石余	704石余	705石余	天領
	小野新田	-----	30石余	30石余	天領
	生田	370石余	370石・新田20石	380石余	天領
	脇浜	516石余	565石余	568石余	天領
	中尾	223石余	226石余	226石余	天領
	滝寺	55石余	55石余	58石余	下総古河藩
	中	227石余	237石余	237石余	尼崎藩
	坂本	291石余	291石余	291石余	尼崎藩
	生田宮	40石余	43石余	43石余	尼崎藩
(旧生田区)	北野	180石余(天領のみ)	241石余	241石余	天領
	宇治野	172石余	173石余	173石余	下総古河藩
	中宮	35石余	35石余	35石余	天領
	花熊	288石余	294石余	294石余	天領
	走水	33石余	33石余	33石余	天領
	二ツ茶屋	67石余	91石余	93石余	天領
	神戸(上部)	424石余	540石余	543石余	天領

※中世末の城ヶ口村は神戸村の枝村となる。

たとはいえ、藩の経済的主要部分を失った尼崎藩の経済は以後、悪化の道をたどることになる。なおこの時幕府に収公されたのは、小野新田・生田・中宮・走水・二ツ茶屋・神戸（以上尼崎藩）・筒井・脇浜（以上旗本領）・熊内（下総古河藩）・花熊（大和小泉藩）の村々である（表1、表2を参照）。そして、天領になった村々はそれ以後、大坂谷町代官所の支配のもとに置かれることになる。

*江戸時代の産業・交通

この頃、中央区の村々の村民は山地や海辺に新田の開発を行ない、二ツ茶屋村の茶屋高浜伊左衛門の高浜新田や、開発者不明の小野浜新田はその代表的なものである。村人の大部分は米麦を中心とする農業を生業とし、その他、素麺・線香・油絞り・酒造などを行っていた。さらに、江戸後期になると、生田川流域には多くの水車小屋が建ち並び、酒米の精米、油絞り、小麦粉の製造の用に供された。

また、海上交通で兵庫津が全国屈指の港として栄えたため、周辺の二ツ茶屋村や神戸村は漕運業が盛んに行なわれた。1676（延宝4）年には二ツ茶屋村に10、神戸村に5の廻船問屋があり、18世紀になるとこれらの問屋が二ツ茶屋に57隻、神戸に130隻の廻船を有するに至ったのである。そして、肥料用の下草取りやシバを刈るためこの辺りの農民は六甲山に入り、慶長期以来、六甲山北側の山田村と中一里山をめぐる境界争いがしばしば起こったりもした。

こうした、農村地帯の中央区を当時、東西に街道が走っていた。いわゆる、西国街道で

【表2】中央区・旧村、幕藩体制下の支配の変遷

筒井	1615(元和1)摂津麻田藩→1616(元和2)旗本領(麻田分家)→1769(明和6)天領	旧置入区	
熊内	1617(元和3)尼崎藩→1711(宝永8)天領→1712(正徳2)下総古河藩→1769(明和6)天領		
小野新田	1664(寛文4)旗、生田村より独立→尼崎藩→1769(明和6)天領		
生田	1617(元和3)尼崎藩→1769(明和6)天領		
脇浜	1600(慶長4)旗本領→1769(明和6)天領		
中尾	1617(元和3)尼崎藩→1711(宝永8)天領→1712(正徳2)下総古河藩→1713(正徳3)天領		
滝寺	1617(元和3)尼崎藩→1711(宝永8)天領→1712(正徳2)下総古河藩		
中	1617(元和3)尼崎藩		
坂本	1617(元和3)尼崎藩		
生田宮	1617(元和3)尼崎藩		
北野	1615(元和1)大和小泉藩→1627(寛文4)旗本領→1711(宝永8)天領		
宇治野	1617(元和3)尼崎藩→1711(宝永8)天領→1711(正徳1)下総古河藩		旧生田区
中宮	1617(元和3)尼崎藩→1711(宝永8)天領		
花熊	1615(元和1)大和小泉藩→1769(明和6)天領		
走水	1617(元和3)尼崎藩→1769(明和6)天領		
二ツ茶屋	1617(元和3)尼崎藩→1769(明和6)天領		
神戸(上部)	1617(元和3)尼崎藩→1769(明和6)天領		

※「兵庫県大百科事典」「兵庫県地名大辞典」などによる

公の墓碑（大楠公墓碑）を建立している。これが湊川神社（多聞通3丁目）の境内の隅にある「嗚呼忠臣楠子之墓」である。

ところで、1769（明和6）年、幕府は突如として今津から兵庫に至る尼崎藩領などに対して幕府天領に移すことを命じ（明和六年の上げ地令）、これにより中央区の村々の大部分は天領として収公される。このため、尼崎藩の中央区における領地は、中・坂本・生田宮の三村を残すのみとなってしまった。尼崎藩主松平忠告の時である。これは、このころ苦しくなってきた幕府財政を建直すため、豊かで経済的に発展していた兵庫とその周辺に幕府が目を付けたからである。代替地を受け



ある。この道は古代・山陽道と呼ばれ、京と九州の大宰府を結ぶ主要幹線道路で、江戸時代になると西国（九州小倉）と畿内を結ぶ道としてにぎわった。この西国街道は京から高槻・箕面・伊丹といった内陸部を進み、西宮付近で海岸に接し、芦屋の打出で二本のルートに分かれた。

すなわち、打出からそのまま平地を結ぶ本街道（ここを大名行列が通った）と、海岸沿いに走る浜街道（庶民はこちらを利用した）である。この二本の道は中央区で合流し一本となり、西へと進んでいた。つまり、本街道は灘区の岩屋から筒井町と脇浜町の間を西に行き、日暮通と吾妻通の間を走り、雲井橋を渡り、旭通と雲井通の間の東問屋街を抜けて生田筋まで行き南に下がる。また、浜街道は生田川の小野柄橋を渡り、小野柄通と御幸通の間を進み、三宮センター街を西へと行き、生田筋で本街道と合流した。そして、合流した西国街道は三宮神社の南の筋を走り、元町通を西へと向かっていた。

なお、この元町通には中世末から近世にかけて家が建ち並びはじめたとい、二ツ茶屋村は戦国末期に神戸村の村人が街道に二軒の茶屋を出したことに始まるという。また、脇浜には旅路の目印となる一里塚が置かれた。

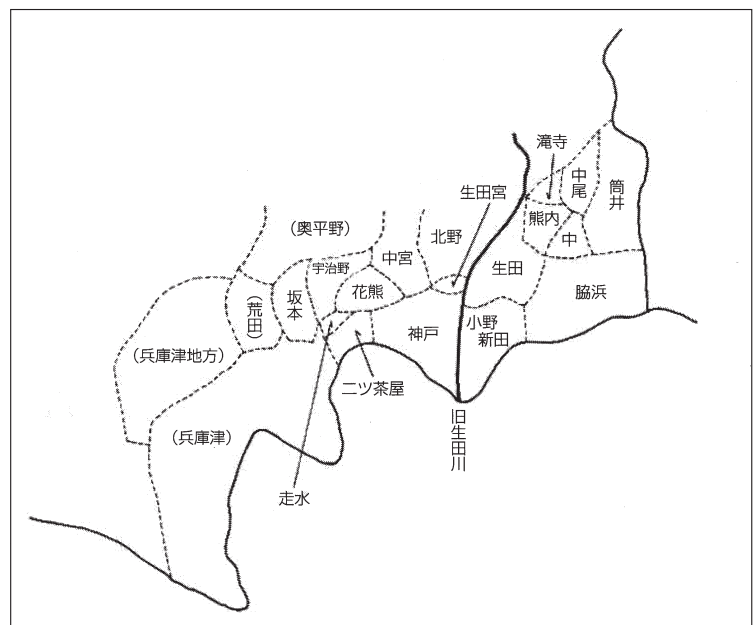
*江戸幕末

19世紀に入り、幕藩体制の動揺が次第に深まって行く中、外国、特に欧米の資本主義諸国から日本に対する開国の要求が出されるようになった。なかでもアメリカは強行に日本の開国

をせまり、1853（嘉永6）年にはペリーが浦賀へ来航して日本に開国を要請した。結局、幕府は翌年の1854（安政1）年に日米和親条約を締結させられ、この中で下田・箱館の二港の開港を認めたため、ここに日本は約200年間続いた鎖国体制にピリオドを打つことになった。

その後、幕府は勅許を得ないまま、1858（安政5）年、日米修好通商条約を締結し、この中で日本は新たに新潟・神奈川・兵庫・長崎の四港を開港することを決め、また、この条約は治外法権を認め、関税自主権を持たないという、日本にとって不平等な条約であった（これは明治時代に条約改正という大きな外交問題に発展する）。

こうした中、外国船来航に伴い摂海防備の声が高まり、その視察のため14代将軍徳川家茂いえもちが1863（文久3）年4月23日に小野浜に上陸した。この時、勝海舟がこれに従い、海舟はこの地に幕府の海軍操練所を設置するよう家茂に願い出た。海舟がここに海軍操



【図3】中央区・幕末の村々 ■()は現在兵庫区 ■喜田貞吉作図「神戸地方幕末所領分割図」を参考に作成

練所（新港町）を建設しようとしたのは、二ツ茶屋村の網屋吉兵衛が神戸村安永新田の浜に築いた（1855<安政2>年）船たで場の設備があったからである。同24日、勝海舟は神戸村海軍所造船所御取建御用並撰海防禦御用を命ぜられている。海軍操練所は1864（元治1）年5月29日に生徒募集を布告して活動を始めたものの、入所者に反幕府派の者がいたことから海舟がその年に解任され、操練所も翌1865（元治2）年3月には閉鎖されてしまった。

さて、先の修好通商条約の中には兵庫の開港が定められていた。もともと、アメリカはその交渉の中で堺を開港地にあげていたが、古都奈良に近いため、幕府はこの兵庫を開港地にしたのである。幕末のあわただしい動乱の中で、兵庫開港は一時延期されたが、1867（慶応3）年5月に兵庫開港の勅許があり、

同年12月7日の開港はさけられなくなった。しかし、兵庫の町の中心にある兵庫港を開港した場合、開港後の外国人とのトラブルが心配され、従って、神戸村小野浜の海軍操練所の地を開港場とした（以後、「兵庫開港」という言葉は用いず、「神戸開港」という言葉を使うことにする）。それに伴い、運上所（税関）、外国人居留地（東遊園地の西の筋から鯉川筋まで、北は三宮神社の南の筋<西国街道>まで）の建設が急ピッチで行なわれた。また、居留地予定地のすぐ北を西国街道が走るため、幕府は大名行列と外国人との衝突をおそれ、西国街道の迂回路も建設した（いわゆる、「徳川道」。この道は東灘の石屋川から六甲山に入り、明石の大蔵谷に至る大迂回路であった）。こうして、開港の準備が整い、いよいよ予定の開港日を迎えることになったのである（【図3】参照）。



中央区の歴史

近・現代

—エキゾチックでおしゃれな町・神戸の誕生とそのあゆみ—

* 明治時代・新政府の体制の下で

1867（慶応3）年10月14日、最後の将軍徳川慶喜は大政奉還を行なった。そして、同年12月7日（太陽暦の1868年1月1日）、ビード

□の家と呼ばれた運上所の建物（海軍操練所のあとに建てられる）を舞台に神戸港の開港式が盛大に行なわれた。停泊中の外国船は祝砲を打ち開港を祝い、神戸の港は世界の



港としての第一歩を踏み出したのである。ところが、その2日後(12月9日)、王政復古の大号令が出され、幕府は否定され、開港準備に全力をあげてきた幕吏は逃亡してしまった。この王政復古の大号令で天皇中心とする新政府を樹立することを決め、ここに260余年に及ぶ徳川幕府の支配は崩壊するのであった。

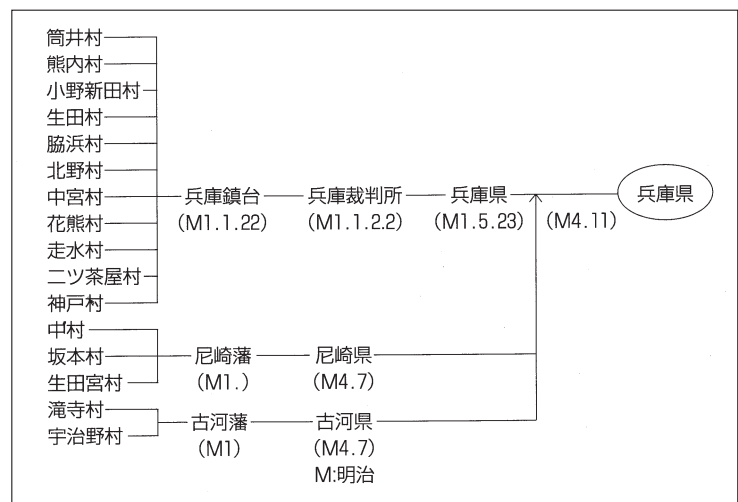
ところで、幕府滅亡後、明治新政府が樹立されてから、開港以前より懸念されていた外国人との衝突事件がこの中央区で起こってしまった。いわゆる神戸事件である。この事件は1868(明治1)年1月11日に起こり、三宮神社前の西国街道で居留地の外国人水夫(イギリス人ともフランス人とも言われている)が西宮へ警備に向かう備前藩士と衝突したものである。これにより、神戸・兵庫の町は一時外国人の軍隊に占拠されるという事態になり、あわてた明治新政府は1月15日、勅使ひがしくせみちとみ東久世通禧を神戸に派遣した。この時、明治政府は王政復古を外国公使に布告する必要を感じており、東久世は事件の処理に入る前に、運上所に外国公使を集め、王政復古を宣言している。つまり、神戸が最初の外交交渉の舞台になったわけであり、その後神戸事件の交渉に入った東久世は、備前藩の滝善三郎を切腹処分にする事でこの事件を解決するに至ったのである。今、三宮神社(三宮町2丁目)の境内には「史蹟 神戸事件発生地」の碑が建てられている。

さて、明治政府は外国人居留地の建設を急いだが、来日する外国人の数が多く、住宅不足が顕著となった。そこで、政府は居留地以外に、東は生田川

から西は宇治川までの間の雑居を認めたのである。そこで、来日外国人は新たな住環境を求め山の手に住居を建てるようになった。これが今日北野町を中心に中央区の山手一帯に残る異人館である。なお、条約が締結されていない中国の人々は、はじめ居留地に住むことを許されず、その近辺に住んでいたが、これが南京町となるのであった。

幕府が滅亡し、明治新政府になって中央区の行政はどうなったのであろう(【表3】参照)。中央区にある村々のうち、幕府直轄領である天領以外の村々はそのまま各藩の支配下にあった。すなわち、中、坂本、生田宮の村々は尼崎藩が、また、滝寺、宇治野の両村は下総古河藩が支配していたのである。それ以外のもともと天領であった村々は明治政府の支配下に移ることになる。つまり、筒井、熊内、小野新田、生田、脇浜、北野、中宮、花熊、走水、二ツ茶屋、神戸といった旧天領の村々は、1868(明治1)年1月22日に明治政府が設置した兵庫鎮台の支配下に入った。なおこの時、鎮台は現在の兵庫区切戸町に置かれた。そして、兵庫鎮台は2月2日に兵庫裁判所と

【表3】 明治維新後の中央区の支配関係



改称される。さらに、同年4月に官制がかわり府県藩の三治制にしたため、兵庫裁判所は廃され、代って兵庫県が5月23日に設置されることになった。この時、後に初代総理大臣となる伊藤博文が初代兵庫県知事に任命され、切戸町の事務所が兵庫県庁となった。なお、その年の9月、県庁は現在の神戸地方裁判所（橋通2丁目）の位置に移っている（県庁が現在地に移るのは1902<明治35>年5月25日のこと）。

その後、明治政府は欧米列強と肩を並べるためには中央集権制を樹立せねばならぬと思い、まず1869（明治2）年に版籍奉還を、続いて1871（明治4）年には廃藩置県を断行したのである。このため、これまで中央区のいくつかの村々を支配していた尼崎藩と古河藩は廃され、代って同年7月14日には、それぞれ尼崎県（中、坂本、生田宮の三村）、古河県（滝寺、宇治野の両村）の一部となった。従って、すでに設置されていた兵庫県とともに、中央区は尼崎県、古河県と三県に分割して統治されることになる。しかし、こうした三県に分かれた体制もその年の終わりに

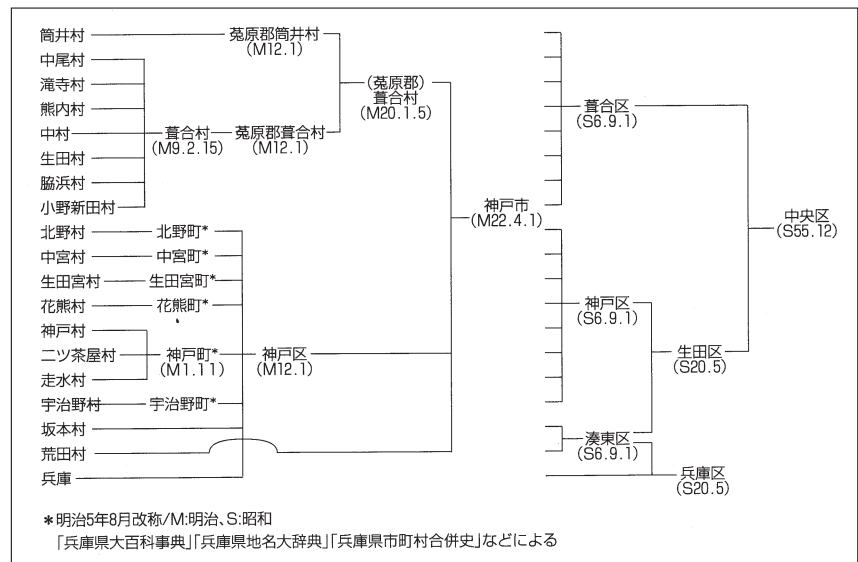
はピリオドを打つ。すなわち、11月20日には尼崎、古河の両県は兵庫県に吸収されることになり、ここに中央区は兵庫県の一画として、県令神田孝平の支配の下に置かれることになったのである。

さて、明治維新後、中央区の村々は統合が進んで行く（【表4】参照）。まず、1868（明治1）年11月に神戸、二ツ茶屋、

走水の三村が合併し神戸町となる。そして、北野、中宮、生田宮、花熊、宇治野の村々は、1872（明治5）年8月にそれぞれ村を町に改称している。さらに中尾、滝寺、熊内、中、生田、脇浜、小野新田の七村が合併し、1876（明治9）年2月15日に葺合村となる。こうした中、政府は1878（明治11）年7月、郡区町村編制法を制定する。この法律により（兵庫県はこの法律で1区33郡に区画される）、翌年の1月、神戸町と北野、中宮、生田宮、花熊、宇治野の各町（以上は1874年に神戸区と呼ばれるようになる）、坂本村、兵庫津を一つとし、神戸区が設置され、北長狭通4丁目（旧県庁舎の南）に区役所が置かれた（後に区役所は相生町1丁目のハローワーク神戸の位置に移る）。また、同時に葺合村と筒井村は菟原郡（芦屋の精道村から葺合村まで）に組み入れられることになる。なお、葺合村と筒井村は1887（明治20）年10月5日に合併し、菟原郡葺合村になった。

さらに政府は1888（明治21）年に市制町村制を公布し翌年施行させた。これによ

【表4】旧村から中央区誕生までの変遷





◀初代神戸市役所
(「区誌生田いまむかし」
P124より)



▼2代目神戸市役所
(「区誌生田いまむかし」
P124より)

て、1889(明治22)年4月1日に神戸区と荒田村、葺合村が一つとなり、現在の中央区の前身とも言える神戸市がここに誕生することになる。この時の人口13万5000人であった。そして、初代市長に鳴滝幸恭を選び、相生町の神戸区役所を神戸市役所に改め(6月21日)、神戸市の事務が開始するに至ったのである(市役所はその後、1909<明治42>年に現在の神戸地方検察庁の場所に移転)。

* 明治時代の産業・交通・教育

明治時代の初期、政府は富国強兵・殖産興業をスローガンに西欧列強と肩を並べる強国をつくるための政策を進めていた。鉄道敷設はその一つである。1874(明治7)年5月11日、全国二番目の鉄道が神戸・大阪間に開通した。中央区には起点の神戸駅と三ノ宮駅が置かれた。なお、東海道本線が全通し東京(新橋)・神戸間が鉄道で結ばれるのは1889

(明治22)年のことである。

一方、私鉄では山陽鉄道(後の山陽本線)が1888(明治21)年に兵庫駅を起点に開業し、翌年神戸駅に接続されている。そして、1905(明治38)年には阪神電気鉄道が三宮・出入橋(大阪)間で開業、市電の前身である神戸電気鉄道(街電)が1910(明治43)年に吾妻通4丁目から浜崎4丁目までの間(12km)で開通、さらに阪神急行電鉄(阪急)が1909(大正9)年に上筒井・大阪間で開業している。

また、現在の中央区を中心に、明治期の神戸の産業が繁栄していった。例えば、川崎正蔵が川崎造船所を今の東川崎町につくったのが1886(明治19)年であり、神戸製鋼所の前身である小林製鋼所が設立されたのが1904(明治37)年のことである。また、明治後期から大正にかけて、当時の三井、三菱の財閥と肩を並べた商事会社である鈴木商店(栄町通7丁目)が設立されたのが1887(明治20)年である。

当時、中央区を流れていた二つの大きな川である生田川と湊川が明治時代に付け替えられることになる。生田川はもともと現在のフラワーロードを流れており、菟原郡と八部郡



▲加納町付近を流れる旧生田川(明治3年頃)
(「区誌生田いまむかし」P66より)



▲埋立工事中の湊川(東川崎町より上流を望む)
(「区誌生田いまむかし」P69より)

の境界であった。普段はほとんど水のないこの川も、いったん大雨が降るとたちまちあふれ、堤防が切れ水浸しになった。この被害を除くため、新神戸駅付近からまっすぐ南下し海岸へ流れる流路を付けることになり、加納宗七がこの工事を請け負った。1871(明治4)年のことである。なお、埋め立てられた川につくられた町が加納町で、この名は加納宗七にちなんでいる。

一方、東川崎町一帯の扇状地を形成してきた湊川は1893(明治29)年の大水害による湊川堤防大決壊をきっかけに改修工事が具体化し、同年から1898(明治34)年にかけて付替工事が行なわれた。結局湊川は長田の荻藻川に合流させることになったのである。

日清戦争(1894年)、日露戦争(1904年)を経て、日本経済は膨張し、神戸でも明治末のこの時期から大正にかけて市街地が東西に延びている。日露戦争の戦勝ムードの中、最初のブラジル移民を乗せて笠戸丸が神戸港を出航したのが1908(明治41)年であった。また、神戸築港が1907(明

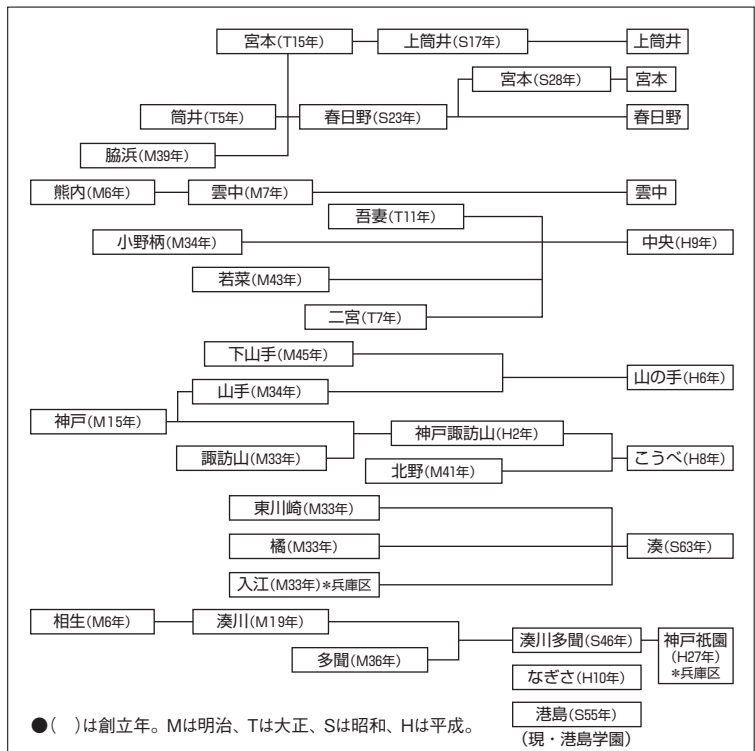
治40)年に始まり、1921(大正10)年に終り、第一突堤から第四突堤までが完成している。

教育面に目を向ければ、明治政府は近代化政策の一環として国民教育を重視し、1872(明治5)年に学制を公布した。これにもとづき、全国に小学校が設立されることになったのだが、中央区内ではこれを受け、1873(明治6)年、葺合地域に熊内小学校(現在の雲中小学校)、生田地域に相生小学校(のち、湊川小学校と改称<のち、「みなとがわ」と読みを変更>。現在の神戸祇園小学校の前身)が設立されることになった。

* 大正時代

明治から大正へと世の中が移り変わる頃、政府では桂太郎と西園寺公望が交互に首相につくという桂园時代が訪れた。しかし、軍部や藩閥などをうしろだてとした桂太郎は世間の非難をあび、1913(大正2)年の大正政

■中央区の小学校の変遷 神戸市教育史より





変で打倒された。この大正政変の余波はこの中央区にも飛び火し、桂を支持した代議士小寺謙吉の邸宅（現、相樂園）に群集が押し掛けるという騒動事件が起こった。

こうした中、ヨーロッパでは1914（大正3）年から第一次世界大戦が勃発している。日本も日英同盟を切札にこの戦いに参戦したが、戦場が日本からはるか離れたヨーロッパであったため、日本本土にはほとんど被害はなかった。逆に日本はヨーロッパへの物資供給のために史上空前の大戦景気に酔うことになる。この大戦景気で海運ブームが巻き起こり、神戸でも勝田銀次郎（勝田汽船）、山下亀三郎（山下汽船）、内田信也（内田汽船）などの船成金が出現、また、中央区に本店をもつ鈴木商店は、番頭・金子直吉の手腕でこの時おおいに繁盛したのであった。

しかしこのような大戦景気の中で、米価は低迷を続け、減産などで米不足の様相を呈していた。このため成金達がこぞって米の買い占めを行ない、一般庶民に入る米が底をつくという有様であった。そして、とうとう1918（大正7）年、富山県で漁村の主婦が越中女一揆をおこし米騒動へと拡がっていった。中央区でも同年8月12日、民衆は買い占めを噂された鈴木商店の本店に焼打ちをかけ、警備の軍隊との衝突を起こしている。なお、この米騒動の経験から生活必需品を安く提供できる市営小売市場の設置を考え、同年11月には東部公設市場（のち生田川公設市場と改称、旭通1丁目地先）などを開いたのである。

さて、大戦後、戦中の大戦景気も下火となり、ついには不況の道へと進むことになる。そして、大戦中は一大ブームを築いた造船業も

前途が危ぶまれるようになってきた。経営者は人員整理などで乗り切ろうとしたが、労働者側がこれに反発し、1921（大正10）年には中央区の川崎造船所や三菱造船所などの労働者約3万人が労働大争議を起こした。この大争議は45日間の長期に渡り、中央区を中心に全神戸をその渦中へと巻き込んだのである。

1923（大正13）年9月1日、関東大震災が起こり、日本の政治・経済に様々な混乱を巻き起こした。そのため、この震災で壊滅状態に陥った横浜港にかわり、神戸港が急浮上してくる。そして、神戸港は新たに生糸輸出港としての性格を持つようになり、国指定の重要港湾となったのである。しかし、この大震災の被災地で震災手形が振出され、その処理問題をめぐって1927（昭和2）年に金融恐慌が起こってしまった。この時、台湾銀行の鈴木商店への不良貸付が発覚し、これが原因で一時は三井三菱を追い抜く勢いをみせた鈴木商店もあっけなく倒産してしまうという結果になる。

* 昭和時代・戦前

満州事変の勃発した年である1931（昭和6）年の9月1日、神戸市は区制を実施している。この時、神戸に八つの区（東から灘・葺合・神戸・湊東・湊・兵庫・林田・須磨）が誕生した。このうち現在の中央区に相当する部分は葺合区・神戸区・湊東区の一部である（【表4】参照）。まず葺合区は神戸市誕生以前の旧菟原郡葺合村がその区域にあたり、区役所を国香通3丁目に置いた。そして、神戸区は神戸市誕生以前の旧神戸区のうち



▲阪神大水害・昭和13年7月5日、多聞通、裁判所を望む

北野町、中宮町、生田宮町、花熊町、神戸町、宇治野町がその区域にあたり、区役所を下山路通5丁目に置いた。また、湊東区は旧坂本村と旧荒田村がその区域にあたり、区役所を多聞通4丁目に置いた。こうして、神戸市は区制を実施し、それぞれの区で業務が開始されたのである。また、区制実施後の1933（昭和8）年11月に、神戸港の繁栄を願って、第一回「みなとの祭」が開催され、「こうべみなとは街から街へ」ではじまるこの時の主題歌『みなと音頭』はその後市民に歌い継がれていった。

この頃から日本は軍国主義化の波が激しくなり、この中央区においても軍国主義の影響は押し寄せていた。そうした中、1938（昭和13）年7月に阪神大水害がこのあたりを襲い、中央区でも生田川や宇治川などが氾濫し、多くの被害を出した。結局、この水害による被害は死者は616人、負傷者1011人、被害総額1億4399万円という大きなものであった。

阪神大水害の翌年（1939年）、ドイツがポーランドに侵攻したことから第二次世界大戦がはじまり、1941（昭和16）年12月8日には日本が真珠湾を奇襲攻撃したことによって太平洋戦争が勃発するに至った。中央区では阪

神大水害の被害に加え、こうした戦争によって人々は苦しい生活を強いられることになった。そして、1945（昭和20）年に入ると、このあたりは激しい空襲にみまわれることになる。3月17日、米軍のB29による夜間大空襲は無差別爆撃であり、これによって中央区内では兵庫県庁、神戸地方裁判所、葺合、湊東の区役所などが焼失し、三菱神戸造船所、川崎重工の工場施設なども大きな被害を受けた。

このような中、神戸市は同年5月に区制を改正し6区（灘・葺合・生田・兵庫・長田・須磨）としている。現在の中央区では、神戸区と湊東区のうち旧坂本村の部分が合併し生田区となり、旧神戸区役所の庁舎を生田区役所とした（【表4】参照）。ここに、現在の中央区は葺合区・生田区という二区体制になったのである。

さて、その後も戦禍はより激しいものとなり、同年6月5日の大空襲は3月17日の空襲をはるかに上回るものであり、区役所はすべて焼かれ、神戸市の中でも葺合区、生田区が最も被害を出し、死者の数も他を圧倒した。この時の神戸市の被害は、死者3184人、重軽傷者5824人で、焼けだされた人は47万人にもおよぶという。こうした戦争も同年8月15日、日本がポツダム宣言を受託し、無条件降伏したため終焉をむかえたのである。



◀昭和20年3月17日の大空襲・旧生田区西部、諏訪山より見る（「区誌生田いまむかし」P118より）



* 昭和時代・戦後

太平洋戦争で多くの被害を出した中央区は、町の復興で戦後の歴史がはじまった。復興が進むなか、葺合区は新庁舎を旗塚通4丁目（現・葺合文化センター）に、生田区は新庁舎を中山手通6丁目（現・県神戸総合庁舎）に、それぞれ1949（昭和24）年に完成させ業務を開始した。

さて、明治末から大正にかけて神戸港の築港により、その中心が西から東へ移るにつれて、中央区の繁華街も西から東へと移っていった。戦前は兵庫区の新開地や神戸駅周辺から元町通が賑わっていたが、戦後は市役所の三宮移転（1957<昭和32>年に新市庁舎が現在の場所に完成）などで三宮センター街から三ノ宮駅周辺にかけての地域にその繁栄を奪われてしまった。これは旧国鉄の神戸駅と三ノ宮駅の乗降客数に顕著にあらわれており、戦前は神戸駅の方が乗降客数が多かったものの戦後それも逆転し、特急・急行などの優等列車は大部分が神戸駅でなく三ノ宮駅に停車している。

また、戦後の復興とともに文化施設の整備もなされ、中央区では1949（昭和24）年、大倉山の市立図書館が再開され、1951（昭和26）年には南蛮美術館（熊内1丁目、現文書館）が開設されている。

戦後、現在の中央区域には大きなビルや建物が建ち並ぶようになり、まさに神戸の経済・産業の中心としての機能を担うようになる。1963（昭和38）年には神戸開港90周年を記念して中突堤にポータータワーが完成した。東京オリンピックの翌年、1965（昭和40）年には神戸に初めての地下街、さんちかタウン

（現・さんちか）がオープンし、当時一世を風靡した和田弘とマヒナスターズがそのテーマ曲「サンティカ・デ・ラマンテ」を唄うなど、初めての地下の街に市民の大きな期待が寄せられていたことがうかがえる。翌1966（昭和41）年、中央区の沖合に神戸初の人工島・ポートアイランドの工事が起工された。1968（昭和43）年には阪急・阪神・山陽・神戸の4私鉄を結ぶ神戸高速鉄道が開業している。翌1969（昭和44）年には当時として神戸で最も高いビル・貿易センタービルが完成している。1972（昭和47）年、布引に新幹線新神戸駅が開業し、神戸の町に新幹線がとまるようになった。1975（昭和50）年、神戸市政の窓口であるインフォメーションこうべがさんちかタウンにオープンしたが、市政窓口を地下の繁華街に設置するのは全国でも初めての試みであり注目された。1977（昭和52）年、テレビドラマの舞台となった北野町の異人館に観光客が押しよせ、異人館ブームがおこったのはこの年である。

さて、現在の中央区にあたる旧葺合区と旧生田区は戦後の復興とともに、人口も順調に増えてきたが、1960（昭和35）年の約17万8000人をピークに以後はその人口も減少の一途をたどっていった。昼間は経済・産業の中心であるこの街も夜間の定住人口が減り、典型的な都心部の過疎化現象が起こったのである。そこで、神戸市行政区再編成審議会は1971（昭和46）年に葺合・生田の両区を一つの区に統合する方針を打ち出し、地元住民の協力をもとめた。1978（昭和53）年には両区内各地で合区に関する説明会が開かれ、さらに同年合区問題協議会を設置し具体的な合



▲昭和40年代・中突堤とポートタワー
(「区誌生田いまむかし」P14より)

区作業へと入っていった。こうした結果、葺合区と生田区は1980(昭和55)年12月1日に一つの統合された区に生まれかわり、ここに神戸市中央区が誕生したのである(合区は区制を敷く政令指定都市の中で、戦後初めてのことだった)。区役所は雲井通5丁目の現在の場所に設置され、区の業務が開始されることになった。また、それまでの旧葺合区役所は葺合文化センターとして、旧生田区役所は県生田庁舎として利用されることが決まったのである。なお、区名である「中央」という名は全市公募の結果の第一位の名称であり、この公募結果をうけた合区問題協議会が、葺合・生田両区が市の玄関口であるとともに経済・交通などの面でも中核的存在であることから「中央」という名がふさわしいとしたため、決定した区名である。

こうして中央区が誕生したわけであるが、その翌年1981(昭和56)年には中央区沖合のポートアイランドが完成し、港島と三宮が新交通システム・ポートライナーによって結ばれた。また、ポートアイランドの完成を記念してポートピア81が開催され多くの人が会場に

足を運んだ。1982(昭和57)年、南蛮美術館と考古館を統合する形で、旧居留地に神戸市立博物館が開館した。1983(昭和58)年には大倉山・新長田間に市営地下鉄が開通し、現在では西区の西神中央から北区の谷上駅までが一本の線で結ばれている。1985(昭和60)年、国際青年年のこの年、大学生のオリンピックとして知られているユニバーシアード神戸大会が開かれ、中央区内でも多くの競技が行なわれた。中央区の花がペチュニアに決まった1987(昭和62)年にメリケンパークがオープンし、神戸海洋博物館が開館した。

* 平成時代・震災前

昭和から平成へと時代が移ったちょうどその年、1989(平成1)年は神戸市制百年とい



▲ふきあい区だより111号

応募の多かった区名				備考
中央	神戸	布引	みなと	応募総数 10,227通
港	南	生合	扇港	
生田	新港	摩耶	新生	
中	神港	葺合	港都	応募種類 825種
三宮	湊	新神戸	緑	

▲新区名応募結果「昭和54年6月公募」



う節目の年になり、中央区でも市制百周年の記念行事が開催され、また、この年フェスティック神戸大会も開催されている。翌1990（平成2）年は中央区が発足してちょうど10年という節目の年となり、中央区にとっては2年続きで大きな節目の年を迎えたわけである。中央区誕生10周年記念式典を開催し、記念誌・「中央区歴史物語」を刊行、同誌はその後、区民をはじめ多くの人々に親しまれることになった。1991（平成3）年には布引ハーブ園がオープンし、同時に新神戸ロープウェー（神戸夢風船）が運行を開始した。旧国鉄湊川貨物駅の跡地に1985（昭和60）年に起工したハーバーランドが1992（平成4）年に完成、街びらきを行なった。1993（平成5）年には、神戸市内の至る所が会場という新しい試みのアーバンリゾートフェア神戸'93が開かれ、中央区でも様々な催しに多くの人々が参加した。1994（平成6）年になると、関西国際空港の開港にともない、神戸と空港の海上アクセス、神戸マリナルルートが誕生し、ポートアイランド二期工事の区域にK-CAT（神戸シティエアーターミナル）がオープン、関西空港の神戸の玄関としての役割を果たすことになった。

このように中央区は行政・経済の中樞を担う街として発展し、また、中央区は三宮東再開発、ポートアイランドの第二期工事や神戸沖空港の計画、地下鉄新線の建設、神戸港の整備など大きなプロジェクトを推進し、未来へ向けてのまちづくりを進めていこうとしていた。しかし、そうした未来のまちづくりや区民の生活を瞬時に打ち砕く出来事が起きてしまった。1995（平成7）年1月17日午前5時46



▲阪神・淡路大震災当時の中央区
5階部分が押しつぶされた神戸交通センタービル

分、150万都市・神戸を襲った阪神・淡路大震災（兵庫県南部地震）である。戦後最大の惨事となったこの地震は、淡路島北部を震源とし、震源の深さ14km、マグニチュード7.2（推定）、最大震度7を記録する大都市直下型のものであった。わずか十数秒の揺れが多く大切な生命を奪い、これまで築いてきたものを破壊し、近代都市を壊滅状態にまで追いやってしまった。三宮周辺から葺合南部にかけての震度7地域を含む中央区でも239人（神戸市全市では4,484人、平成7.11.13時点）が亡くなり、建物も6,411棟が全壊全焼（神戸市全市では74,396棟が全壊全焼、平成7.12.21時点）、避難者数も最大で90ヶ所・39,090人（神戸市全市では589ヶ所・236,899人、平成7.1.28時点）を数えた。電気・ガス・水道といったライフラインはすべて切断され、また、中央区内の鉄道もすべて寸断され、被災した人々は、苦しい生活を強いられることになったのである。中央区では同年2月に区内で最初の仮設住宅が脇浜に設置された。そして、同年3月5日には神戸市合同慰霊祭が、神戸文化ホールで行なわれ、数多くの参列者が震災で犠牲となった多くの人々の冥福

を祈った。大都市を突如として襲い、その機能を完全にマヒさせ、多くの犠牲者や被災者を出した阪神・淡路大震災、この1995（平成7）年1月17日午前5時46分に起こった出来事を、我々は決して忘れはしないし、また、風化させてはいけないのである。

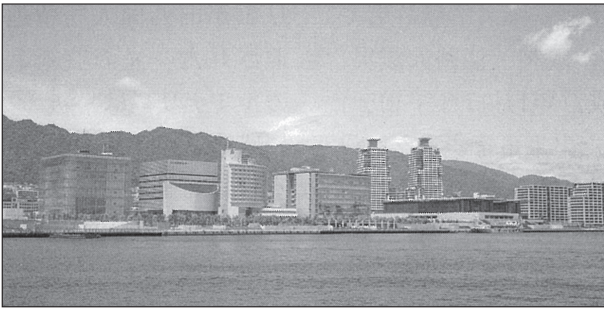
* 平成時代・震災後から令和へ

阪神・淡路大震災で壊滅的被害を受けた中央区も震災から時が経つにつれて、倒壊した建物の後に新たに建物が建ち始め、急ピッチで復旧・復興が進んでいった。

震災の年（1995年）の12月、震災で犠牲になった方々への鎮魂と復興の希望を込めて第一回神戸ルミナリエが旧外国人居留地を会場に開催された。光の芸術とも言えるこのルミナリエは、訪れた多くの人々に感銘を与え、これまで神戸の年末の風物詩として毎年開催されている。震災からちょうど1年たった1996（平成8）年1月17日、『中央区歴史物語』が震災の記録誌としての意味をも含めて改訂され、書名も新たに『新・中央区歴史物語』として刊行された。1997年7月にはメリケンパークに、震災による港の被災状況をそのまま後世に伝える施設として「神戸港震災メモリアルパーク」が完成した。中央区と灘区にまたがる臨海エリアに、神戸市復興計画のシンボルプロジェクトとして整備されていた東部新都心・HAT神戸が1998（平成10）年3月に完成・街びらきをしたし、同年7月には北野小学校の跡地を利用して「北野工房のまち」がオープンし北野地域のあらたな観光スポットの仲間入りをした。1999（平成11）年11月には、市街地の公園やポートアイランドに建設

されていた区内の仮設住宅（ピーク時には3796戸建設）が完全に解消され、震災の爪痕の一つが消えることになった。震災から5年が経過した2000（平成12）年は中央区発足20周年という節目の年で記念式典が開催され、また、この年には葺合消防署と生田消防署が統合され小野柄小学校跡地に新たに中央消防署が設立された。翌2001（平成13）年7月には、三宮・花時計前駅と新長田駅の間でインナーシティ活性化のリーディングプロジェクト、地下鉄海岸線・夢かもめが、震災で特に大きな被害を受けた中央区から兵庫区・長田区の海岸部の沿線住民の活性化の促進を期待して開業された。

2005（平成17）年には、震災10年と合区25年の節目として、『新・中央区歴史物語』を全面改訂して書名も新たに『神戸歴史トリップ—新・中央区歴史物語（改訂版）』を刊行した。そして、ポートアイランド二期の沖合には2006（平成18）年2月16日に神戸空港が完成し、神戸の空の玄関口が誕生したのである。そして、神戸空港と関西国際空港を結ぶ海上航路「神戸—関空ベイ・シャトル」も就航している。空港開港のこの年、震災で倒壊した神戸新聞会館が再建され「ミント神戸」の愛称でオープンし、その1階部分に長距離バスの拠点となる「三宮バスターミナル」が供用開設された。翌2007（平成19）年には、ポートアイランドに神戸学院大学、神戸夙川学院大学、兵庫医療大学がキャンパスを構え、大学生の街としての顔も持つようになった。この年、ポートアイランド第2期地区では、「神戸医療産業都市（KBIC）」（1998<平成10>年にスタート）において、神戸空港開港が起爆剤と



▲HAT神戸全景

なり企業数が急増し、3月に次世代スーパーコンピュータ「京^{けい}」の誘致に成功した（2012年供用が開始）。2009（平成21）年には、新型インフルエンザの流行により区内の公立学校が臨時休校となった一方、ブラジル移民の拠点であった旧・神戸移住センターが、「海外移住と文化の交流センター」として開館した。

区制30周年にあたる2010（平成22）年、神戸港の鉄道貨物の拠点であった旧・JR貨物神戸港駅の跡地に震災復興記念の一環として「みなとのもり公園（神戸震災復興記念公園）」がオープンした。2011（平成23）年には、区内がスタート（市役所前）とフィニッシュ（ポートアイランド）になる「神戸マラソン」の第1回目が開催されている。また、2012（平成24）年、中央区マスコットキャラクター「かもめん」が誕生し、今では区民のアイドル的存在となっている。2013（平成25）年、ハーバーランドの商業施設がリニューアルされ「umie」となり、「神戸アンパンマンこどもミュージアム&モール」もオープンし、小さな子どもたちに親しまれている。2015（平成27）年には、神戸の玄関口・三宮周辺の将来をどのようにすべきかを考えるため「都心の将来ビジョン・三宮再整備基本構想」の策定が行われることになった。神戸開港150周年にあたる2017（平成29）年、メリケンパークに「BE KOBE」

モニュメントを設置した。

約30年続いた平成の時代も、2019年5月1日に「令和」と元号が改まり、新時代の幕開けを迎えることになった。なお、この年（令和元年）、永く三宮の顔として存在してきた「そごう神戸店」の名前が消え、「神戸阪急」に店名を変更してあらたなスタートを切った。区制40周年を迎える2020（令和2）年、前年の末から流行の兆しをみせ始めた新型コロナウイルスがついにパンデミックを起こし、4月8日には緊急事態宣言が発出され、中央区でも様々な活動が停滞するなど大きな影響を与えることとなった。約1か月で宣言は解除されたものの、区制40周年となる12月1日現在でも、区民はコロナと共存しながらの新しい生活様式を続けている。

このように先史時代から現代まで中央区の歴史を振り返ってみた。我々が歴史を学ぶのは単に過去を解明するという点だけにあるのではない。むしろ、解明された過去を未来にどう役立てるかが重要なのである。そこで、今一度過去の歴史を振り返り、現状を把握し、振り返った歴史を踏み台にして、我々はよりよい中央区の未来を創って行く努力をしていかなければならないのである。



▲中央区マスコットキャラクター「かもめん」

著者あとがき

本書は、中央区合区40周年を記念し、中央区の歴史を概観したものである。私は、30年前、中央区誕生10周年記念誌として『中央区歴史物語』を、そしてその改訂版である『新・中央区歴史物語』、『神戸歴史トリップ—新・中央区歴史物語（改定版）』を執筆してきた。これら3冊は発刊ごとに多くの方々にお読みいただき、現在ではすべて払底してしまった。

中央区に永くお住まいの方々に加え、近年の都心回帰で、あらたに中央区に住むようになった方も多し。そこで、40周年という節目の年に、中央区に関係する方々に、この区のことをより理解していただくことと本書を刊行した。本来であれば、前著の全面改訂を行うことができればよかったのであるが、種々の制約から、前著の通史編の部分を取り出し、補筆・改訂したものが本書の内容である。

我々が歴史を学ぶのは単に過去を解明するためだけではない。解明された過去を踏み台にして、未来にどう役立てるのが重要なのである。本書が中央区の過去を見つめ、中央区の現在を把握し、それによって未来の中央区を考えようという方々のお役に立てることができれば幸いである。

令和2年12月1日

中央区合区40周年の日に

道谷 卓

道谷 卓 (みちたに・たかし)

1964(昭和39)年、神戸市東灘区御影生まれ。兵庫県立御影高等学校を経て、関西大学法学部卒業。関西大学大学院法学研究科博士後期課程単位取得。

現在、姫路獨協大学副学長・人間社会学群現代法律学類(法学部)教授。専門は刑事訴訟法で、研究テーマは公訴時効制度。2010年の殺人の時効が廃止された刑訴法改正の際には、「報道ステーション」をはじめ、テレビ、ラジオ、新聞などのマスメディアにコメントが取り上げられた。

そのかわり、神戸深江生活文化史料館副館長として、神戸の歴史の研究・普及活動を行っている。郷土史関係の主な著書に『日本史の中の東灘』((財)神戸市民文化振興財団、1989年)、『中央区歴史物語』(神戸市中央区、1990年)、『新・中央区歴史物語』

(神戸市中央区、1996年)、『うはらの歴史再発見—ちょっと昔の東灘』(東灘復興記念事業委員会、2000年)、『神戸歴史トリップ』

(神戸市中央区、2005年)、『続・御影町誌』(御影地区まちづくり協議会、2014年)、

『御影が生んだ偉人 嘉納治五郎』(東灘区役所、2018年)など、多数。



中央区のあゆみ 先史時代～現代

令和2年12月1日 初版発行

令和3年1月8日 第2版発行

道谷 卓 著者

神戸市中央区役所まちづくり課 発行

神戸市中央区雲井通5丁目1番1号 〒651-8570

電話 078-232-4411(代)



中央区制 40 周年記念プロジェクト企画
なかなかやるやん！中央区「ナカナカ」